

エッセー

英語カリキュラム改革と共に歩んで

異文化コミュニケーション学部教授 高橋 里美

2001年度に立教大学に着任後、私はすぐに全カリ英語教育プログラムの運営母体である英語教育研究室（以下、英語研）のメンバーとして活動を開始した。前任校でも全学の英語教育プログラムの責任部署にいたとは言え、着任早々、まずそのカリキュラムの複雑さとユニークさに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えている。当時の必修英語カリキュラムは Language and Culture Course (LCC) と Communicative Course (COC) の2コースから成り、計8つの多種多様な科目が徹底した統一カリキュラムのもとに展開されていた。実際、この「統一」を実践するために親シラバスなるものが全科目担当教員に配付され、年度中にFDが4回も行われていた。また、プレイスメントテスト結果に基づく「能力別クラス編成」や一部の科目が「ペアクラス」として週2回展開されていたこともユニークであり、驚きであった。そして、私のこの驚きは着任数年後に訪れるカリキュラム改革で頂点に達したとっていいだろう。実に「大改革」なのである。特に2006年度と2010年度の新カリキュラムに向けての改革プロジェクトは私が深く関わったものとして印象深く、今でも懐かしく思い出される。以下、英語研メンバーとして私がこの2つのカリキュラム改革、特に必修カリキュラム改革にどのように関わったのかを述べてみたい。

全カリ発足は1997年であるが、その7年後の2003年春に2006年度の新カリキュラムに向けてのプロジェクトが立ち上げられた。2004年度から2005年度にかけて私は全学共通カリキュラム運営センターで言語A（英語）の専門委員を務めており、当時の英語研主任の一ノ瀬和夫先生と共にこのプロジェクトの中心メンバーとしての役割を果たすことになった。必修カリキュラムの改善課題は「1年次集中（前期・後期各4コマ）」と「クラスサイズ」の見直しであったが、前者については最終的には実施されず、LCC・COCの2コース制のもとでの1年次必修8単位履修（科目数は計8から7に減少）が継続されることになった。したがって、もう一つの課題であるクラスサイズの見直しこそが、結果として「大改革」へとつながることになる。そもそもこの課題は、LCCとCOCの定員格差（LCCの方が定員が多かった）の是正と少人数クラスの実現のために浮上した課題であった。特に言語教育において少人数クラスの実現は究極の目標であり、「何としても」という感があったことは言うまでもない。ここで標的となった科目が Reading & Listening というコース共通科目であった。当該科目は新カリでは指定テキストを使って通常教室で展開するバージョン（R&L-R）と、Web教材を使ってCALL（Computer Assisted Language Learning）対応PC教室で展開する

バージョン (R&L-PC) の 2 種類があり、異なる学期に展開されるように組まれていたのだが、このうち R&L-PC を 1 コマ 100 人以上の大人数授業として展開する案が急浮上したのである。すなわち、一人の教員が 3～4 クラスを同時に担当するというものである。なお、Web 教材使用の E ラーニングであることから、教員が張り付く必要はないのではないかという主張が英語研から出されていたが、完全自習形態では単位認定はできないとされ、教員を置くことを前提にした授業形態を考案しなければならなかった。問題は 8 号館 5 階の CALL 対応 PC 教室のそれぞれがクラス毎に担当されていたことから、どのように一人の教員が複数の CALL 対応 PC 教室に分散している学生に授業を行うのかということであった。「CALL 対応 PC 教室の一つにいる教員の音声と映像が他の CALL 対応 PC 教室にいる学生に届けばいいのですよね。」何と私のこのつづやきで事態は急展開したのである。物理的に PC-LL 教室が音声・映像配信網で結ばれ、教員がいない教室にはアルバイトの補助スタッフを置くなどのシステムが構築され、大人数授業が可能となったのである。これにより浮いたコマ数を使って、LCC の定員減と 2 年次以降の自由選択科目（後に自由科目）の増コマが実現したことは感慨深く、私にとって当該カリキュラム改革は忘れえないものとなったのである。

さて、もう一つの思い出深いカリキュラム改革は 2010 年度新カリに関連するものである。その当時、私は英語研主任（2009 年度～2010 年度）を務めていたため、当該カリキュラム改革を確実に実行し、2010 年度から新カリが発足できるようにまい進していた。その意味で私にとっては極めてインパクトの大きいカリキュラム改革であったが、先のカリキュラム改革のように記憶に強く残るような個人的なエピソードはあまりない。ただ、この改革については、「ほぼ全面的に変えた」と言える内容を伴う改革であったことを強調したい。具体的には、2 コース制を廃止し、1 年次生は全員 4 つの必修科目（年間 6 単位）を履修することとなった。（R&L-PC の延長として）e-Learning は大人数授業として展開したことから、Discussion を除く科目はすべて定員 20 名の少人数クラスとなり、Discussion については何と 8 名という極少人数クラスが実現した。なお、この改革で科目数減少に伴い必修単位数が 8 から 6 に減少したことについては、英語研メンバーの中で危機感が共有された。すなわち、科目数・単位数と学習量は比例するものと考えられ、8 単位を維持すべきという意見が圧倒的に多かったのである。また、単位数の減少は同時に教員の担当コマ数の減少も意味し、それについての兼任講師への説明は非常に辛い思い出として残っている。さらに、これまでの手作りのプレイスメントテストに替わり、GTEC という Web テストを導入し、春学期末時点での英語力査定を通して能力別クラスの再編成を秋学期に実施した。このように、立教着任時に驚きの対象であった英語カリキュラムに多数の変更を加えることとなり、そこに自らが中心的に関与したことにひときわ深い感慨を覚えるのである。

英語研メンバーとして従事したのは 2019 年度までの 19 年間であったが、カリキュ

ラム改革を通して、私の着任時の驚きは今では誇りへと変化している。この3月末に定年を迎え、立教を去るが、英語研には常に変化を求める姿勢を維持してほしいと思う。

たかはし さとみ